

2018年10月17日(水) 18:00~19:30 シリーズ「グローバル・ジャスティス」第61回
キャロル・マン氏講演会「戦争における女性たち」

2018年10月17日、第61回「グローバル・ジャスティス」セミナーで、「戦争における女性たち」をテーマに、キャロル・マン氏による講演会が開かれた。フェミニスト社会学、美術史、歴史学、そして人類学と幅広い分野で活躍してきたマン氏は、ジェンダーと武力紛争をめぐる研究を深めるために、NGO「紛争下における女性たち Women in War」を立ち上げ、活動と研究に取り組んでいる。講演内容は以下の通りである。

最初に、自分自身のことについて話させてください。わたしは、フェミニスト社会学者であり、活動家です。

90年代初期に、わたしはボスニア戦争下であったサラエボに行きました。わたしがボスニアを訪れたのは、草の根の女性グループの人たちと、学校を再建するという人道的なプロジェクトで働くためでした。わたしには経験はありませんでしたが、なにかをしなければならぬ、という強い思いがありました。わたしをそのように駆り立てたのは、わたしの両親、そして祖父母は、第二次世界大戦を生きただけであり、そして、わたしの息子を絶対に兵士にしたくなかったし、わたしの子どもたちが二度と戦争を経験してほしくなかったからです。思い出してみてください、ボスニア戦争は、第二次世界大戦以降初めてのヨーロッパでの戦争だったのです。わたしはもっと、戦争について理解する必要がありました。そこで、わたしは(社会科学高等研究院 EHESS)というパリにある大学にもどり、博士号のために、最初にボスニア、その後、幾度も訪れたアフガニスタンについて研究しました。

それ以来、わたしはとくに中東におけるほとんどの紛争地帯、そしてまたアフリカにも訪れました。ボスニア、バルカン半島、アフガニスタン以外にも、パキスタン、ウクライナ、アルメニア、アゼルバイジャン、レバノン、イスラエル、イラク、イラン、コンゴなどです。わたしがどこにいこうとも、女性になにが起こっているのかを学びます。そして、男女の関係性がどのように変化し、そして、支配関係がどう働いているのか、といったことを調査します。また、わたしが始めた二つのNGOを通じて、そうした現地の女性たちのグループと一緒に、人道的なプロジェクトに取り組んでいます。二つのNGOとは、一つはFeMaid というもので、25年前に初め、もうひとつは、Women in War で、10年前に始めました。

女性たちはあまりにしばしば集団レイプの被害者です。コンゴでもそうでしたし、アフリカのある地域、セルビア人民兵によるボスニアのケース、ISISに奴隷化されたイラクにおけるヤジディ教徒たちもその例です。それは、ジェノサイド計画の一部でした。わたしたちが見てきたように、それは政治的問題で、敵の男性や国民的名誉感情を攻撃し、社会全体を集団的に辱める一つの方法です。

集団レイプは、どんな過去に行なわれたものであっても、それらを犯した政府によってなによりも、認識される必要があります。サバイバーがいて、かれ・彼女たちの子どもたちが

います。著名な生物学的精神医学者である、レイチェル・ユフダ教授の作品を通じて明らかにされたように、トラウマは世代を超えます。だからこそ、認識されることは重要なのです。正義がなされることは、長期にわたる償いの、最も中心的な形です。

わたしは、1930年代、40年代と同時期におこった集団レイプについて、二つの例をとりあげたいと思います。つまり、朝鮮半島の女性たち（中国人・日本人もいましたが）に対する日本兵による集団レイプ、それは、いっけんすると無実聞こえる「慰安婦」という用語で呼ばれていましたが、じっさいには、恐ろしい状況での強制売春だといえます。もう一つは、ナチスドイツからの解放軍であった、ソビエト兵士たちによる、おもにベルリンで起こった集団レイプです。

わたしは、どんな戦争でも、真の英雄 hero とは女性だと感じています。つまり、家族を世話し、未来が来るといふ夢を持ち付けられるようにした母親や、姉妹たちです。わたしにとって、食べるものが無い時にさえ、うどん一杯を調理して家族を幸せにすることは、誰かを殺すよりもずっと、勇敢な heroic ことだと思います。他者の世話をすること、ケアし、高齢者は子どもたちをできるだけ幸せにしてあげようとするのは、戦時において本当に勇気があることです。なぜなら、それはとても困難なことだからです。

わたしの国であるフランスのことを考えて見ましょう。ほとんどの通り、地下鉄の駅、記念碑は、ルイ14世から、ナポレオン、ドゴール将軍、第二次世界大戦の有名なレジスタンスたちを記念していますが、女性はまったくいないのです。フランス革命はいうまでもなく、ナチスドイツと闘った偉大な女性たちがたくさんいたにもかかわらず、です。

だからこそ、戦争を異なる、ジェンダー視点でみることはとても大切です。わたしは、フランスの大学で『ジェンダーと紛争』というタイトルの主題を教えた、最初の教員です。そして、いつか、この研究分野に特化した研究所ができることを期待しています。

とくに不正義と残酷さが世界にもたらされるとき、知識はわたしたちに、世界で考え、そして行動するための道具を与えてくれるのです。

みなさんからの質問を楽しみにしています、今日でも、そうでなくても。ご清聴ありがとうございました。

講演中にマン氏は、戦時下の性暴力についてもっと知りたい人のために、Rachel Yehuda 氏の諸論文や、フェミエイドのウェブサイト (www.femaid.org) を紹介していた。なお、マン氏の論文もウェブサイト (Academia.edu) から手に入れることができる。

報告者：對馬果莉（GS 研究科博士後期課程）